

# 東京高円寺阿波おどり

夏のおわりを彩る高円寺の風物詩。

踊り手を 観客を 言葉を越え 国境を越えて

魅了するこの祭りの歴史にふれる。





1958(昭和33)年「第2回高円寺ばか踊り」

### 東京の夏の風物詩

例年8月最終週の土日の2日間、1万人の踊り手が参加し、100万人の観客が熱狂するイベントが杉並区内で行われている。それが、東京を代表する祭りの一つ「東京高円寺阿波おどり」だ。

高南通り(高円寺駅と青梅街道の間)の中央演舞場を中心に、高円寺駅の南北8カ所の演舞場での流し踊りと、「座・高円寺」など、屋内での舞台踊りが楽しめる。

60年以上の歴史があり、現在はNPO法人東京高円寺阿波おどり振興協会(以下、阿波おどり振興協会)、高円寺阿波おどり実行委員会が主催。阿波踊りを通じて「人づくり」「街づくり」に貢献することを目的として活動している。

### 始まりは「高円寺ばか踊り」

1957(昭和32)年8月上旬、高南商盛会(現高円寺パル商店街振興組合)に青年部が誕生した。その記念行事として、高円寺にふさわしくにぎやかで、商店街を踊りながら練り歩ける阿波踊りを行うことを決定。名称は、本場徳島の阿波ではないということなどから「高円寺ばか踊り」となった。

当時は阿波踊りの経験者がおらず、



1960(昭和35)年「第4回高円寺ばか踊り」

チンドン屋が演奏する「佐渡おけさ」のようなリズムに合わせて、白塗りの化粧をした男女38名が高円寺在住の日本舞踊家に習った踊りを披露するという、今とは異なるものだった。高円寺の隣の阿佐ヶ谷で1954(昭和29)年から行われていた「阿佐谷七夕まつり」に触発され、七夕まつりを抜くという意気込みで始まったが、地元2,000人の観客を前に「恥ずかしいやらバカバカしいやらで、一刻も早く終わろうと踊るといよりは走り抜けた」(『高円寺阿波おどり三十周年記念誌』)ため、30分の予定がわずかに5分で終了したそうだ。

### 開催の危機

1959(昭和34)年になると、商店街の売り上げには直接つながらないことや、経費がかかりすぎることから、実施について反対意見が増え始める。同年開催の第3回大会の前に、青年部で存続か中止かを決める無記名投票が行われ、10対9の1票差で存続が決まった。

1961(昭和36)年、徳島新聞社を通じて、徳島県人会で結成された「木場連(現在の天恵連、東京都江東区深川)」と出会う。1962(昭和37)年には、当時木場連の連長だった故・鴨川長二さんから指導を受け、本格的な阿波踊りの習得が始まった。

### 地域の理解と発展

1963(昭和38)年、木場連との出会いから2年目となる第7回の開催を迎えるにあたり、「高円寺阿波おどり(現在の東京高円寺阿波おどり)」に名称を変更。

15回目の開催を迎えた1971(昭和46)年には、新聞社の後援や、徳島県知事からの阿波踊り普及による感謝状の授与などもあり、地元での人気も飛躍的に高まった。また、この頃から「高円寺に東京名物あり」と言われるようになった。

1957(昭和32)年に38名の踊り手で始まった「高円寺ばか踊り」は、今や、高円寺阿波おどり連協会に所属する30の独立連(※)を中心とした、名実共に東京を代表するイベントの一つに成長した。

### 家族で楽しむ阿波踊りの醍醐味

生活者観測データ「生活定点 1992-2022」によると、家族で共通の趣味を持っていると回答した人は23%であるが、高円寺には「阿波おどり」を共通の目標とする家族がいる。

阿波踊り歴35年の松浦りささんは、2010(平成22)年10月に結成された胡蝶蓮の立ち上げメンバーで、副連長である。現在は夫、長男、長女、次女、親戚を含む8名で「阿波おどり」に参加



第60回大会に親子で参加(写真:松浦りささん)



胡蝶蓮・松浦さん一家(りささん:後列中央)



萩野谷ダリヤさん(写真左・メキシコ出身)とシクロバ・エリスカさん(スロバキア出身)

している。

りささんが練習する姿を小さい頃から見ていた長男は4歳で入連。母親と同じ踊り手ではなく大太鼓を選んだ。夫の将幸さんは笛、娘2人は踊りを担当している。家族でも踊りや、笛、太鼓、三味線の鳴り物など、自分の好きな形で楽しめるのも阿波踊りの醍醐味の一つである。

家族で参加することについて、りささんは「始めたばかりの時は小さな太鼓をたたいていた長男が、いつの間にか大人と同じ太鼓をたたくようになったことや、長女が次女に踊りを教える姿に子供たちの成長を感じます」と笑顔で語った。

## 外国人の連員

### — 憧れから守るべき伝統文化へ

1976(昭和51)年に「アメリカ建国200年祭」に招待されたことをきっかけに、高円寺の阿波踊りは海外に活躍の場を広げた。また、外国人が入連することも増えてきた。

2022(令和4)年3月、天狗連にシクロバ・エリスカさんと萩野谷ダリヤさんが入連した。共通の趣味である三味線を人前で演奏する機会を求めているチャレンジであった。萩野谷さんは「三味線を始めたのは、津軽三味線の



2017(平成29)年台湾公演、松山慈祐宮での様子(写真:東京高円寺阿波おどり振興協会)

コンサートで音色に聞きほれたからです。先生の言葉を理解するために、日本語も勉強するようになりました」と話す。

2022(令和4)年7月、天狗連の一人として「かせい阿波踊り」でデビューしたシクロバさんは「観客の拍手が大きくて、まるで全員が応援してくれているようでした。これまで阿波踊りは憧れの一つでしたが、連員と一緒にこの伝統的なお祭りを守りたいと思うようになりました」と語る。

### 日台交流の架け橋としての阿波踊り

杉並区は2011(平成23)年から台

湾と「中学生野球交流事業」を行っていたが、文化芸術活動を通してさらに交流を深めるべく、2015(平成27)年4月に国立台湾戯曲学院と「相互交流を推進する宣言書」を取り交わし、その調印式典において「東京高円寺阿波おどり」を披露した。

阿波おどり振興協会と共に公演を企画した台湾出身の杉並区

2019(平成31)年に台湾中部、雲林縣で行われた踊りのチラシ(資料:東京高円寺阿波おどり振興協会)



リンモクショウ  
文化・交流課林黙章参与は「驚くほどの歓迎ぶり、会場の一つの歴史ある松山慈祐宮には、身動きが取れないほど多くの方々が見に来てくださいました。特に華やかな女踊りが大好評でした」と話す。

その後、台湾公演は 2017（平成 29）年、2019（平成 31）年にも実施。160 名の踊り手が訪台した 2019 年の公演について、一般財団法人杉並区交流協会の幸内事務局長は「演舞終了後に台湾の方々が踊り手にサインや写真撮影を求めるなど大にぎわいでした。日本語で“ありがとう”と伝えている方も大勢いて、訪台を重ねるごとに人気が高まっていると感じまし

た」と語る。

### 協会を設立し本格的に始動

1977（昭和 52）年、高円寺一带の自治会、商店会、企業、有志によって高円寺阿波踊振興協会が設立された。

発足当初は情報発信が十分とは言えず、また、「阿波おどり」の抱える問題を把握していない関係者も多かったという。『「踊れ高円寺」人が創り街が育む五十年』によると、近隣住民からは「交通規制が敷かれて車が入れない」、観客からは「会場の場所が分からない」などの声が上がっていたとある。

こうした問題に向き合うべく、2003（平成 15）年から高円寺阿波おどり連



本大会パル演舞場（高円寺パル商店街）のにぎわい（写真：東京高円寺阿波おどり振興協会）



第63回の開会式には、なみすけ、ナミー、高円寺のキャラクター「サイケ・デリーさん」が登場  
(写真:東京高円寺阿波おどり振興協会)



コロナ禍に開催した「東京高円寺阿波おどりplus+」ではプロジェクションマッピングと融合  
(写真:東京高円寺阿波おどり振興協会)

協会所属連の連員が演舞場の運行や事前準備に従事。これを機に運営と踊り手の意識が共有されるようになった。

そして、2005(平成17)年3月16日、NPO法人として東京都より認可を受け、阿波おどり関係者が一体となって活動する組織として再生した。

## コロナ禍の影響と今後

2020(令和2)年からの3年間の本大会は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、屋外での演舞は中止となった。1957(昭和32)年に高円寺で阿波おどりが始まって以来(1957年当時は「ばか踊り」、天候悪化以外の理由による中止は初めてのことだった。だが、「阿波おどり」の火を絶やしてはいけないと、阿波おどり振興協会は2021(令和3)年に座・高円寺で「座・SAJIKI」「座・舞台」の2種

類の舞台公演を計画するも、緊急事態宣言により残念ながら無観客でのオンライン配信となった。

2022(令和4)年も屋外での演舞は中止となったが、有観客での舞台公演が実施され観客を楽しませた。2023(令和5)年8月、高円寺に熱い夏が戻ってくることが待ち望まれる。



2022夏「座・SAJIKI」@東京高円寺阿波おどり  
(写真:東京高円寺阿波おどり振興協会)



2022夏「座・舞台」@東京高円寺阿波おどり(写真:東京高円寺阿波おどり振興協会)

## 東京高円寺阿波おどり 関連年譜

昭和 32	8月、高南商盛会(現高円寺パル商店街振興組合)に青年部が発足、第1回高円寺ばか踊り開催
昭和 34	存続の危機、無記名投票により1票差で存続が決まる
昭和 36	徳島県人会の木場連(東京都江東区深川)と出会い本格的な阿波踊りを学ぶ
昭和 38	「高円寺阿波おどり(現在の東京高円寺阿波おどり)」に名称変更
昭和 40	JR高円寺駅から青梅街道まで演舞場が拡大
昭和 41	初の独立連が結成
昭和 51	初の海外公演(アメリカ建国200年祭)
昭和 56	独立連による連長会結成
平成 3	第3回世界陸上競技選手権大会の閉会式に踊り手300名が出演
平成 17	主催:東京高円寺阿波おどり振興協会が法人化
平成 23	第55回大会の開会式で徳島市長より徳島市長賞が贈呈される
平成 27	国立台湾戯曲学院と「相互交流を推進する宣言書」を取り交わし、その調印式典において阿波踊りを披露
令和 2	新型コロナウイルス感染症の拡大により、屋外での公演を中止
令和 3	2種類の舞台公演を企画するも、緊急事態宣言によりオンライン配信に変更

※独立連:企業や商店会のバックアップのない、踊り手が自主運営する連

執筆:太田英之

撮影:山川健一、TFF

協力:東京高円寺阿波おどり振興協会、一般財団法人杉並区交流協会、天狗連、胡蝶連

参考文献:「高円寺阿波おどり三十周年記念誌 どよめきの三十年 おどれ高円寺」(高円寺阿波踊り振興協会/1986年) / 「めくるめく発展の四十年 おどれ高円寺 高円寺阿波おどり四十周年記念誌」(東京阿波踊り振興協会/1996年) / 「踊れ高円寺」人が創り街が育む五十年」(NPO法人東京高円寺阿波おどり振興協会/2005年) / 「おどれ高円寺 未来へつなぐ六十年」(NPO法人東京高円寺阿波おどり/2016年) / 「あわおどり 高円寺の十八年」(関根敏邦/1974年) / 「高円寺 村から街へ」(高円寺パル史誌編集委員会/1992年) / 「純情商店街 高円寺銀座商店会協同組合設立40周年」(高円寺銀座商店会協同組合/1998年) / 「生活定点1992-2022」(博報堂生活総研) <https://seikatsusoken.jp/teiten/>